「建築」テーマに魅力発信

県内5美術施設 芸術祭も見据え連携

県内5カ所の公立美術施設が連携して魅力を発信する「青森アートミュージアム5館連携協議会」と県は2月27日、青森市の県立美術館でトークイベント「アート県／圏『青森』の挑戦！」を開いた。今春から始める連携プロジェクト第1弾のテーマを「建築」と発表。ウェブ上で5館や周辺の特徴ある建築を紹介するコンテンツを構築するほか、各館で建築の見どころを案内するツアーやワークショップなどを行う。基調講演では、5館を基盤とした芸術祭開催も提案された。

5館の設計者は、青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）が安藤忠雄さん、県立美術館が青木淳さん、十和田市現代美術館が西沢立衛さん、弘前れんが倉庫美術館が田根剛さん、11月開館予定の八戸市美術館が西澤徹夫さん、浅子佳英さん、森純平さん。

協議会会長の杉本康雄・県立美術館館長は「それぞれ館の設計者は日本でもトップラス。建築に興味のある人や学生など、美術館の建築を見に来ている人が多い。アーカイブ的に残せるものを5館で考えながら進めていきたい」と話した。

基調講演（事前収録）では、十和田市現代美術館の総合ディレクターと弘前れんが倉庫美術館の館長特別補佐を務めるエヌ・アンド・エー代表取締役の南條史生さんが「5館もの美術館が連携できるのは青森だけではないか」と評価。5館連携でできることの一つに「芸術祭開催などによる経済・文化振興」を挙げ、瀬戸内国際芸術祭などを例に、地域芸術祭の経済波及効果の大きさを紹介した。

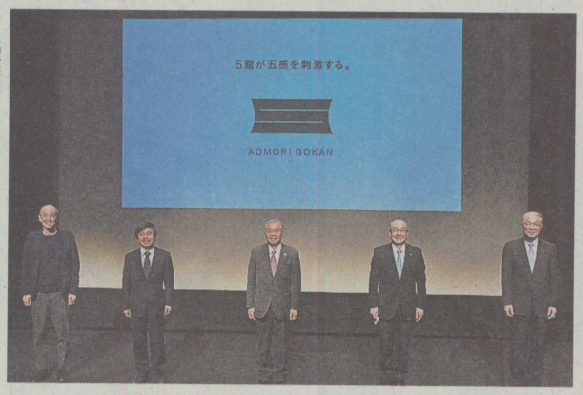
これからはコロナやSDGs（持続可能な開発目標）などへの対応が必要だが「青森は大変自然に恵まれている。特徴のある自然資産、祭りといった文化資産を使った芸術祭も可能性があると思う」と語った。

アートフォーラム（事前収録）では、南條さんと杉本館長、十和田市現代美術館の鷲田めるろ館長、昭文社ことりっぷ担当の大川朝子さん（八戸市出身）、大阪大学共創機構准教授の木ノ下智恵子さんがオンラインで議論した。

大川さんは、青森の魅力を①個性の強さ②ホスピタリティー③アートと温泉―とし「美術館が街を巡る拠点になるといい」と述べた。鷲田館長は「ACACはアーティスト・イン・レジデンス、八戸市美術館はラーニング機能など、5館の個性を組み合わせれば力になる」と語った。

イベントの様子は「ユーチューブ」内のチャンネル「AOMORI GOKAN」で見られる。

（大友麻紗子）



「建築」をテーマに5館が連携してプログラムを行うことを発表したトークイベント。各館の代表が集まった